

エリアキャンパスもがみのフィールドラーニングとESDについての一考察

山形大学 教育開発連携支援センター

小田隆治

はじめに

山形大学「エリアキャンパスもがみ」で平成18年度から実施している全学共通の教養（基盤）教育の授業「フィールドラーニング」は、現在は全国の多くの大学で実施されている、地域と連携した体験型授業のパイオニアの役を果たしてきた。「エリアキャンパスもがみ」とこの授業の詳細については「エリアキャンパスもがみ」のWebサイトをご覧ください^{※1}。

「フィールドラーニング」の授業は、平成30年度の前期まで「フィールドワーク」という授業名を名乗ってきたが、「フィールドワーク」という授業名が学問の実地調査方法として広く定着していることを鑑み、それとの混同を避けて教養教育のジェネリックスキルを身につける授業法として「フィールドラーニング」の用語を用いるようになった^{※2}。

「フィールドラーニング」の授業の目的は、学生たちがコミュニケーション能力や能動性などのジェネリックスキルを身につけることにある。本授業は、特定の学問の知識や研究方法を学ぶことを前提としてはいない。地元の匠が講師となって、少子高齢化・人口減少の先進地域である山形県最上地域での自然・文化・産業などの体験を通して、自分たちが生きる時代と社会を考えてもらうところに力点が置かれている。教員があらかじめ考えておいた課題を学生に提示することはない。個人による独自の課題発見があればこそ、その後の課題探求や課題解決に意欲的に取り組んでいけると考えるからだ。

フィールドラーニングは、80代の老人たちとコミュニケーションをとり、自分のこれまでの生い立ちやこれから目指す社会について内省的に思考を掘り下げる豊饒な空間と時間になっている。このように、主体性は個人の思考が尊重されて始めて成立するものである。

筆者はしばしば「フィールドラーニング」を野球の試合に例えてきた。少年の頃、繰り返し打撃の練習をし、守備の練習をし、走塁の練習をしてきた。だが、毎日守備の練習だけを繰り返していれば、野球の楽しさがわからないだろう。子供は打撃や守備が未熟でも、時々試合をしなければ野球から離れていってしまう。試合には、野球の要素がすべて備わった総合性がある。大学においても、それぞれの学問を学ぶだけでなく、それまで学んだことを活用できる総合的な場が必要なのではなかろうか。その一つのかたちが「フィールドラーニング」なのである。

「フィールドラーニング」は、学生たちの体験を通した自由な発想を尊重しているが、日本の過疎地域の最前線である最上地方から学生たちは「少子高齢化」「人口減少」などの問題を抽出していく。こうした問題は、現代の日本を覆いつくし、国民の誰もが課題に挙げる問題群となっていることは偽りのないことである。学生がこうした問題群を挙げたからと言って、それをステレオタイプな思考だと非難することはできない。かれらがマスコミなどから自然と耳に入ってきた情報を、体験を通して自分のものとしてリアルに捉えた瞬間だと思えるからだ。

本授業では、この課題発見に続く課題探求や課題解決に必ずしも深さを伴っているわけではない。これは一年生という学年を考えれば仕方がないことだ、と私は割り切っている。2単位の授業に過度の期待をかけることは酷なのである。

学生たちは「少子高齢化」「人口減少」という問題群を自分のものとして発見していく。一方で、こうした問題群の広がりにはぼんやりとしたものである。いままでは、授業の担当者としてそれを良しとしてきた。課題発見から探求・解決は、高学年の他の授業に委ねればよいのである。

以上のように、「フィールドラーニング」は学生たちの自主的な思考を重視してきたが、グローバルな視座を学生たちに提供することが必要なことは、授業開設当初から念頭にあった。実際、この授業の開設時からシラバスに「もがみを知ることは、山形を知り、日本を知り、ひいては世界を知ること

つながっていきます。」と書いている。だが、これまでグローバルな具体的な視座の提供は、ほとんど行ってこなかった。学生たちにグローバルな視座を提供することによって、かれらの思考はより深まっていたのかもしれない。こうした観点に立って、本論ではユネスコが提唱する「ESD(Education for Sustainable Development)」について考えてみるようにしたい。

ESDとは

現在、ESDの国際的な総元締めであるユネスコ（国際連合教育科学文化機関、United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization: UNESCO）は、「諸国民の教育、科学、文化の協力と交流を通じて、国際平和と人類の福祉の促進を目的とした国際連合の専門機関」³³である。

文部科学省の日本ユネスコ国内委員会のWebサイトには、ESDは「持続可能な開発のための教育」と訳されている。続けて、「今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発、といった様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。つまり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。」と述べている。

ここで述べられている「現代社会の課題を自らの問題としてとらえ」というところは「フィールドラーニング」の教育目的と合致するところである。さらに、「身近なところから取り組む」という点においても体験型の授業である「フィールドラーニング」と一致している。

また、WebサイトはESDの実施には、特に次の二つの観点「○人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと、○他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと」が必要であることを強調している。この点についても、「フィールドラーニング」のジェネリックスキルの形成を教育目的としていることと符合している。

さらに、「環境、平和や人権等のESDの対象となる様々な課題への取組をベースにしつつ、環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組むことが重要です。」と述べられており、ここで強調されている「学際性」と「総合性」も「フィールドラーニング」の趣旨と合致している。

以上のように、「フィールドラーニング」はこれまでほとんど意識することはなかったが、ESDと親和性が非常に高いことがわかる。

ESDが目指す学び方・教えかたが3つ挙げられている。そのうち「○単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをとること」は、まさに「フィールドラーニング」がとっている教育手法そのものである。また、「○活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと」は我々が努めてきたことである。3点目の「○「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置付けること」についても、全体のスキームは「フィールドラーニング」と一致している。

残念ながら、最終的な「具体的な行動」を促すことにおいては、「フィールドラーニング」はそれほど力点をおいてこなかった。授業が終わった後の地元と人たちとの継続的なつながりや活動への参加は、「エリアキャンパスもがみ」の開設当初から地元の人たちから強く望まれていることであった。だが、大学から50～100km離れた「エリアキャンパスもがみ」に学生たちが行くには、経済的かつ時間的な余裕がそれほどあるわけではないかれらに、大学関係者が行くことを無理強いすることはできないと考えていた。正直に告白すると、学生たちがいつか自発的に行くようになるのを見守るしかなかった

のである。このことを地元の関係者に何度も説いてきた。地元としてできることは、「フィールドラーニング」の教育の質を上げて、履修者が授業を終わった後もまた来たくなるように持っていくしかない」と説明してきた。実際、単発的に履修後に行われる地元のイベントに自主的に参加する学生が表れるようになった。さらに、金山町のプログラムを履修した学生が大学のボランティアサークルを立ち上げ、地域を支援するようになっていった。これは上記の学生たちの主体的でありかつ「具体的な行動」に結びついた例である。

「フィールドラーニング」が2単位の授業である限り、達成できる目標は自ずと限られている。授業外を見据えた広がりを持った教育を、我々は考えておかなければならない。すべてが授業によって構成されるカリキュラムが大学教育ではない。授業外も包含した教育プログラムこそが学生たちの主体性を育んでいく。それは授業を改善すればするほど丁寧に設計され、主体性を育むための自由度が低減することにつながりかねないことと関連している。教育と言う名の教員の直接・間接の管理や支配の及ばない、学生だけの授業外の学習や活動によって、真に汎用性の高い主体的な行動が生まれてくるのである。

SDとは

E S Dの前提となっているSD (Sustainable Development) について見ていこう。それはE S Dが総合性を強調しすぎると、ややもするとあれもこれもという枚挙主義に陥り、核心が見えづらくなるきらいがあるからである。

SDは現在「持続可能な開発」の訳語が用いられているが、そもそもは、1987年に「環境と開発に関する世界委員会」(委員長: G.H.ブルントラント)が公表した報告書「Our Common Future」の中心的な概念として登場した「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」をさしている^{注4}。

1974年にアメリカのF.S.ローランド(1995年ノーベル化学賞受賞)によって、フロンによるオゾン層の破壊のメカニズムが提唱され、実際、1985年に南極でオゾンホールが発見された。1988年、アメリカ上院の公聴会においてJ. ハンセンが地球温暖化説を唱え、その後研究が進む中でこの説が社会のコンセンサスを得ていった。そして温暖化の主因は人為的な化石燃料の燃焼による温室効果ガスの増加である、と共通認識されるようになった。1980年代以降、熱帯林の破壊や生物多様性の喪失など、国境を越えた地球環境問題が浮き彫りとなった。地球環境問題は一国で解決できる問題ではない。そこで、1992年に、ブラジルのリオデジャネイロで「国連環境開発会議」が開催され、環境分野での国際的な取り組みに関する行動計画である「アジェンダ21」が採択されたのである。

地球環境問題は、国境を越えた地球全体の問題であり、かつ先進国と開発途上国つまり南北問題でもあった。開発途上国も経済発展する権利を有しているが、森林の破壊や化石燃料の過度の消費を行うと地球環境問題は取り返しのつかない状況に陥る恐れがある。それかと言って、地球環境問題を引き起こした先進国だけが既得権に胡坐をかいていることは許されることではない。ここに深いジレンマが存在している。開発途上国が経済的に豊かになるためには、開発を閉ざすことはできない。そこで「持続可能な開発」というSDの概念が登場したのであり、それが世界のコンセンサスとして機能しているのである。だが、持続可能な地球や社会は「持続可能な開発」によってもたらそうとすることは、決して絶対的な真理とよばれるようなものではなく、数多ある思想の中の一つの選択肢であることを忘れてはならない。なぜかと言うと、思想的には、「開発をしない持続可能な社会」も選択肢としてありうるからである。

E S Dの概念図の中で、E S Dの基本的な考え方は、1) 気候変動、2) 生物多様性、3) 防災学習、4) エネルギー学習、5) 環境学習、6) 国際理解学習、7) 世界遺産や地域の文化財等に関する学習、8) その他関連する学習、とほとんどすべての事象が包含される総合性・統合性が強調されている。「持続

可能な社会の構築」のスローガンが強調されると、この現代日本にあつては「少子高齢化」「人口減少」が社会の持続性と深く関わる問題としてクローズアップされている。だが、ESDそしてSDの核となって問われていることが「地球環境問題」であることを見落としてはいけないであろう。

フィールドラーニングとESD

これまでESDとSDを見てきたように、体験や行動を重視する授業法はフィールドラーニングと非常に親和性が高いことを理解できるであろう。また、広い視点に立った教育目標も共通している。

「エリアキャンパスもがみ」のフィールドラーニングの授業プログラムの中には、間伐材のチップを利用したストーブを作る工場や、雪を夏場のクーラーとして活用した研究所や施設の見学など、「地球環境問題」とマッチしたプログラムも存在している。さらには「湿原の保全」などの生物多様性や環境学習に含まれるものも存在している。さらには、ユネスコの世界遺産に登録された「新庄祭」にも参加している。このようにESDのあらゆるものを包含する基本的な考えにフィールドラーニングはうまく合致している。

一方で、フィールドラーニングとESDのマッチングに違和感を覚えるところは、フィールドラーニングが深いところで「地球環境問題」を問題として据えていないところにあるのであろう。さらに、重要なことは、学生たちを直接指導する現地講師の人たちの中で何人の人たちがSDやESDという言葉や理念を知っているかと言うことに行き当たる。おそらく現地講師の方々はSDやESDについてあまり知らないのではなかろうか。

フィールドラーニングとESDをリンクするためには、現地講師の人たちを対象としたSDやESDの学習会を開くことが必要なのであろう。これは特段難しいことではない。我々は毎年、現地講師を対象とした研修会を行っている。これにSDやESDの基本的な考え方を示せばいいだけなのである。そして自分たちが行ってきたプログラムを「持続可能な社会の構築」と関連して考えてもらえればよいのである。ESDは何も学生に限った教育ではなく、あらゆる世代や職業人を対象としたものである。

おわりに

「エリアキャンパスもがみ」のフィールドラーニングとESDを結び付けることによって、何が生まれてくるのであろうか。それはややもするとフィールドラーニングが「Act locally, Think locally」に陥り、思考と行動が自閉する恐れがある、という反省の上に立っている。やはり、フィールドラーニングにも地球規模でのグローバルな視野を必要とする。我々が腑に落ちる問題発見を重視するあまり、広い視野を持つことに抑制がかかってきたのかもしれない。「少子高齢化」「人口減少」の最先端問題地域である最上地域は、日本の問題の核心をついているが、世界を見れば「人口増加」が問題であり続けているのだ。世界の人口増加と日本の人口減少を同時に捉える思考が必要である。さらに、地域や国境を越えた地球環境問題は、解決しなければならない問題として我々一人ひとりの前に存在している。

フィールドラーニングを受講する学生には海外からの留学生もかなりいる。留学生と日本人学生そして地元の人たちが、「持続可能な社会」を頭の中にインプットした上で意見交換をすれば、すぐにグローバルな展開が図られることだろう。

「エリアキャンパスもがみ」のフィールドラーニングが「Act locally, Think locally, and Think globally」に発展し、将来学生たちが「Act globally」に活躍してくれることを望む。ESDはフィールドラーニングの中で、学生たちに地球規模の問題意識を持たせることを教えてくれるはずだ。

- 注1 山形大学「エリアキャンパスもがみ」のWebサイトは (<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/mogami/index.html>) である(2019年4月9日現在)。「エリアキャンパスもがみ」の設立経緯については、小田隆治著『大学職員の力を引き出すスタッフ・ディベロップメント』2010、ナカニシヤ出版を参照のこと。フィールドワーク：共生の森もがみについては、小田隆治・杉原真晃・酒井俊典著「地域の人たちと交流する現地体験宿泊型授業—山形大学「エリアキャンパスもがみ」の試み」第60回東北・北海道地区大学一般教育研究会 研究収録：75～78頁、2011を参照のこと。
- 注2 「フィールド・ラーニング」の用語については、小田隆治・呉屋淳子・橋爪孝夫著「フィールドラーニングは教養教育の新しい教育方法である」山形大学高等教育研究年報8, 38-43、2016を参照のこと。
- 注3 ユネスコについては、文部科学省のWebサイト (<http://www.mext.go.jp/unesco/003/001.htm>) 参照のこと(2019年4月9日現在)。
- 注4 SDについては、外務省のWebサイト (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/sogo/kaihatsu.html>) 参照のこと(2019年4月9日現在)。